

ナゴルノ・カラバフ紛争とアゼルバイジャンの世論

マムマドフ・アリベイ

本稿の主要目的は、ナゴルノ・カラバフ紛争により社会生活上の直接的な影響を受けると同時に、最も心情的な関わりをもつと思われるアゼルバイジャン人国内避難民の見解や立場を、彼ら彼女らの出身地、避難先等で比較しつつ、それぞれの視点から同紛争を考察することにある。

2015年9月、筆者はアゼルバイジャンにおけるナゴルノ・カラバフ紛争の捉え方を明らかにするため、ナゴルノ・カラバフやその周辺地域に居住していたアゼルバイジャン人国内避難民、および、アゼルバイジャンの知識人に対し、「ナゴルノ・カラバフ問題」に関する見解、現状に対する満足度、帰還希望、アルメニア人との混住に対する態度等についてのアンケート調査を実施した。国内避難民への質問紙法を用いた質問紙調査である。

調査においては、質問者側による情報の取捨選択を可能な限り回避すべく、質問用紙によって多くの国内避難民に対して同じ質問をし、回答も定型化することで、それぞれの意見を明確に比較できるようにした。

質問紙調査の対象者は、バクー市、およびバルダ市在住の国内避難民とした。なお、回答者は住所・氏名、連絡先は無記入とし、個人情報保護に配慮した。質問紙の配布、回収は筆者自身が行った。質問紙調査の質問数は11項目とし、記述式の回答欄も設けた。質問紙は、国内避難民の居住地区や避難している学校の寮の居住者、および学校や幼稚園の教職員に配布し、記入を依頼した。バクー市では2015年9月8、24日、バルダ市では同月10、11日に質問紙を配布し、回収は当日または翌日に行った。標本数はバクー市内100、バルダ市内100の合計200(回収率99.5%)である。

この質問紙調査で特に注目すべきは、回答者たちが単なる一般市民ではないという点である。回答者たちは自分たちの土地から強制的に移住させられた、直接ナゴルノ・カラバフ問題の影響を受けている国内避難民なのである。

国内避難民への質問紙を用いた聞き取り調査の結果、アゼルバイジャンの世論が地理的に分かれていることが明らかになった。特に、同じ出身者で避難先が異なる国内避難民の比較

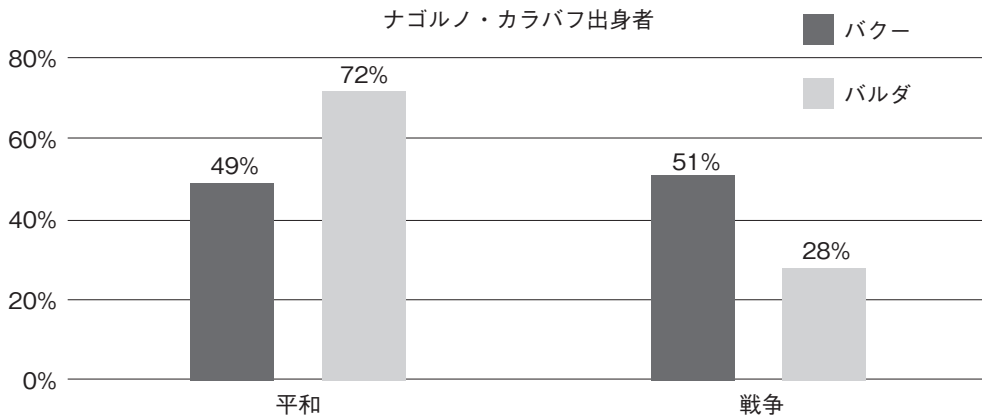


図1 解決手段について、出身地と避難先双方に着目した分析

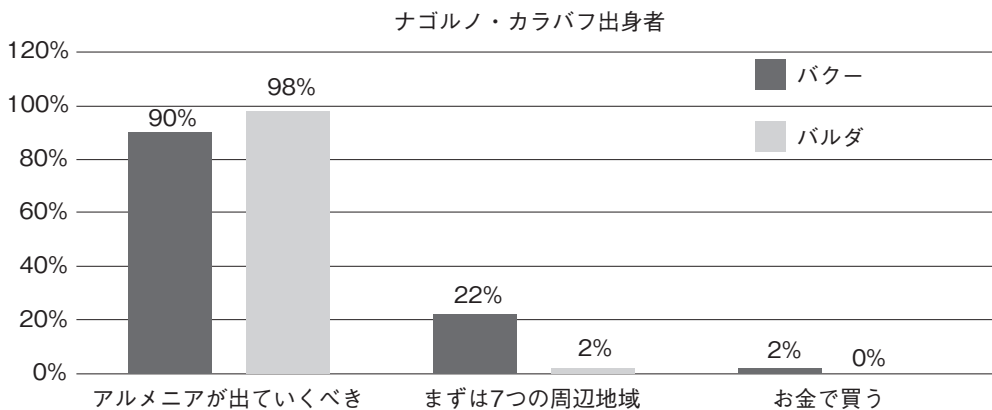


図2 解決策について、出身地と避難先双方に着目した分析（複数回答可）

分析でその違いが浮き彫りとなった。また、ナゴルノ・カラバフのアルメニア人住民同様、アゼルバイジャン人の国内避難民も決して平和志向的ではなく、むしろ好戦的であることも明らかとなった。特にナゴルノ・カラバフ出身者で、バクー在住者の51%が戦争による解決を支持したことは注目に値する（図1を参照）。

アルメニア軍の占領地域を一括返還してもらうか、旧自治州の周辺地域をまず返還してもらうかは、国内避難民にとっては直接的な影響のある問題である。ナゴルノ・カラバフ出身者でバクー在住の約90%が「アルメニアが出ていかねばならない」と回答し、約22%が「まずは7つの周辺地域」と答えた。バルダ在住者の場合の割合は、それぞれ98%、2%であり、バクー在住者の方が一括方式に固執しない者が多いことがわかる（図2を参照）。

一方で質問紙調査の結果を総合的にみると、現状に満足している国内避難民は2割にも満

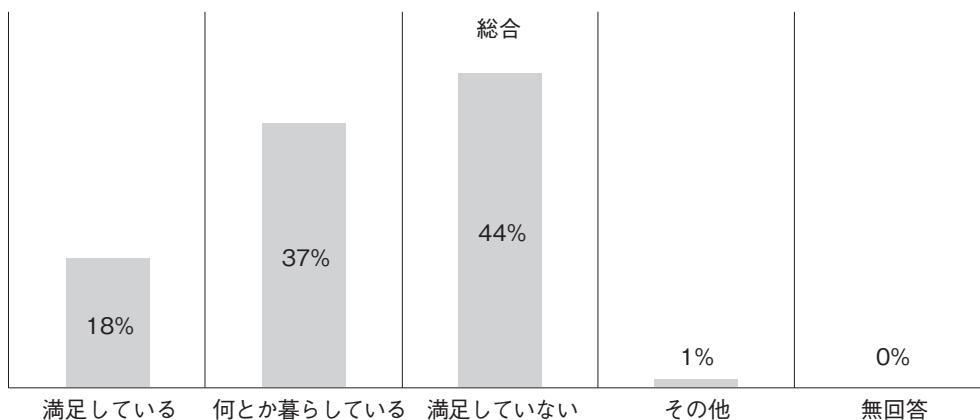


図3 現状に対する満足度

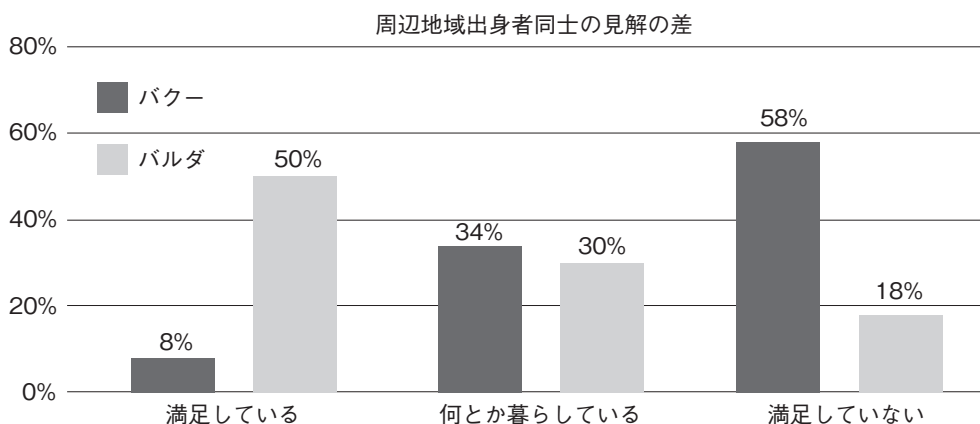


図4 現状に対する満足度について、出身地と避難先双方に着目した分析

たなかった。「満足していない」が最も多く約44%であった(図3を参照)。また同じ周辺地域出身者でも、避難先によって意見の違いが出ている。バクー在住者の場合、現状に「満足している」が8%にとどまったのに対して、バルダ在住者では50%に上った。バクー在住者の中では「満足していない」と回答した者が最も多く58%で、バルダでは18%となった(図4を参照)。

アルメニア人との混住について、「混住できない」との回答が最も多く約54%あったものの、一般人に罪がないこと(約17%)、かつて混住していたこと(約9%)を理由に、「混住できる」と答え、融和的な態度をとった者もいた(図5を参照)。

また周辺地域出身者の場合でも、避難先によって意見の対立が生じている。バクー在住者の38%が「混住できない」、10%が「混住は危険」、6%が「混住は時期尚早」と答えたのに対し、

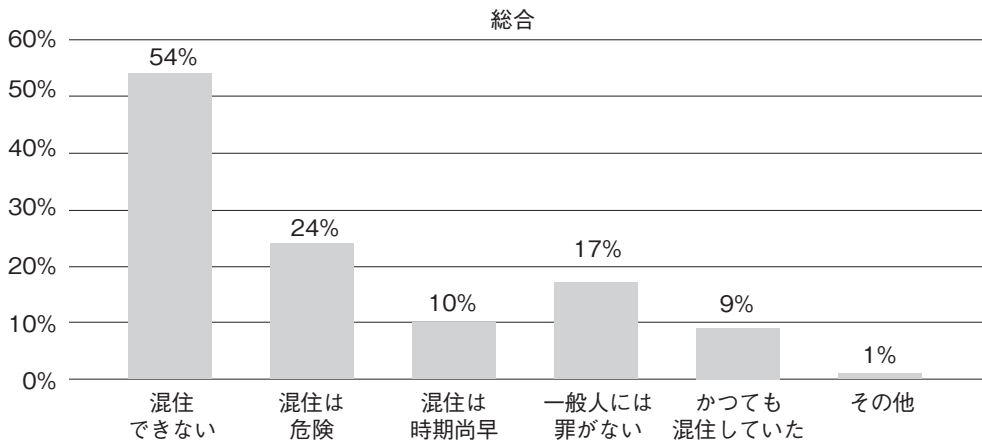


図5 アルメニア人との混住に対する意識

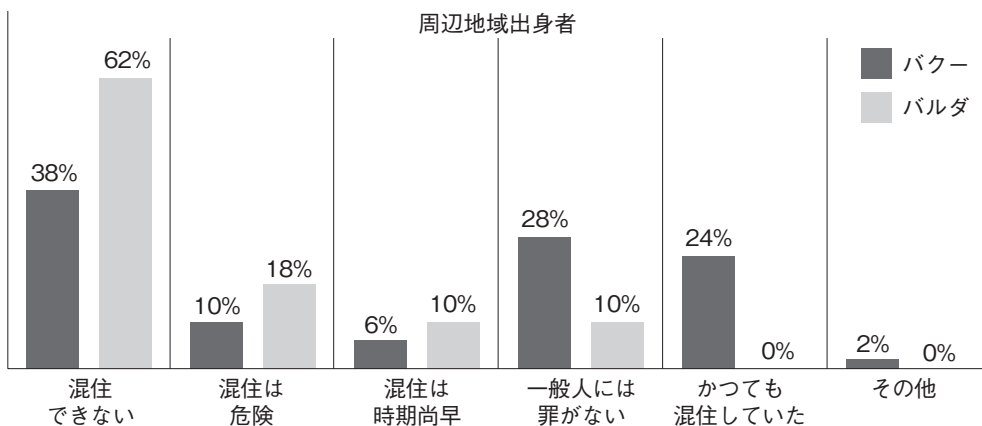


図6 アルメニア人との混住に対する意識

バルダ在住者の場合、それぞれ62%、18%、10%であった。一方で、「一般人には罪がないので、混住できる」、「かつて混住していたので、今後でもできる」と回答したバクー在住者はそれぞれ28%、24%であったのに対し、バルダ在住者の場合それぞれ10%、0%であり、バクー在住者の方がアルメニア人との混住に融和的な立場をとっていることがわかった(図6を参照)。

(北海道大学大学院文学研究科)